

平成18年12月の解説（府県天気予報）

【12月の天候状況】

上旬の前半は冬型の気圧配置となって日本海側の地方では雪や雨が降り、太平洋側の地方では晴れました。上旬後半から月半ばにかけて低気圧や前線の影響で全国的に雨や雪の降る日が多くなりました。その後下旬の前半にかけて弱い冬型の気圧配置となり、日本海側の地方では雨や雪の降る日が多くなりましたが、太平洋側の地方では晴れました。下旬の後半は低気圧が太平洋沿岸を急速に発達しながら通過して全国的に雨が降り、通過後は強い冬型の気圧配置となって日本海側の地方では雪や雨が降りました。

月を通しての日照時間は西日本の日本海側では平年並、その他の地方では平年を下回りました。降水量は西日本の日本海側では平年並でしたが、その他の地方では平年より多く東日本、北日本の太平洋側では多くの観測地点で平年の300%を超えました。気温はほぼ全国的に平年より高くなりました。

【12月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報、明後日予報ともに81%で、明日予報は例年^(注)より2ポイント低く、明後日予報は例年より1ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報は北陸、九州北部、九州南部地方で例年より5ポイントから13ポイント低く、沖縄地方で5ポイント高くなりました。明後日予報は北陸地方で例年より7ポイント低く、東北、四国、沖縄地方で5から6ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は例年に比べて中国地方で0.3大きく、東北地方で0.3小さくなり、全国平均では例年より0.1小さい1.5でした。また、最低気温の予報誤差は例年に比べて、九州北部、沖縄地方で0.3小さく、全国平均では例年より0.1小さい1.6でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の天気予報から】

12月は冬型の気圧配置となって太平洋側の地方では晴れることが多くなりますが、時には前線や低気圧の影響で雨や雪の日が続くこともあります。昨年（2006年）の12月にも、本州南岸を通過した低気圧や前線の影響で、東京地方では12日から15日まで4日続けて雨が降りました。特に14日の夕方から翌朝にかけては、関東地方全域で雨となりました。

12月13日の夕方に発表した14日（明日）の天気予報では、

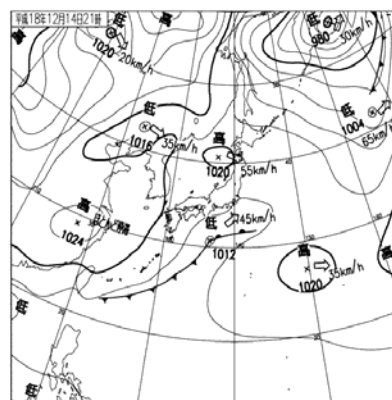


図1 2006年12月14日21時の地上天気図

東京地方の天気をくもりとしました。これは、14日には本州の南海上に低気圧が発生して東北東に進むものの、低気圧が陸地から離れて通過するため、広い範囲で雨が降ることはないと判断したためです。

ところが、13日に本州から四国・九州の南で停滞していた前線が14日になって活動が活発になったことと、低気圧が本州に近いところで発生したことから、降水域が予想以上に北に広がりました。

南海上の前線上で低気圧が発生する場合、予想以上に降水域が広がる可能性があります。降水が広がる範囲は、上空の気圧の谷と前線の位置関係の微妙な違いによって大きく異なることが、このような場合の天気予報を難しくしています。

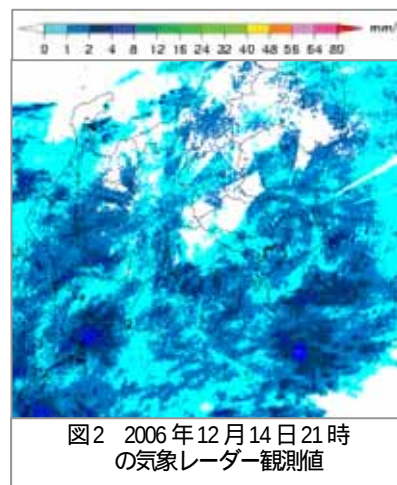


図2 2006年12月14日21時の気象レーダー観測値

【2月の天気予報の利用にあたって】

西高東低の気圧配置となって北風が続く冬も終わりに近づくと、春にかけて低気圧が発達しながら日本海を通過することが多くなります。低気圧が近づいてくると、この低気圧に向かって強い南よりの風が吹きます。立春から春分の間に初めて吹く強い南よりの風を「春一番」と呼んでいます。

2004年2月14日から15日にかけて、低気圧が発達しながら日本海を通過したため（図3）、14日には全国的に強い南よりの風が吹き「春一番」となりました。図4はこの日の広島市の気象経過です。昼ごろから急速に風が強まって気温が上がるとともに、湿度が急激に下がって一時的に20%を下回り、その後も乾燥した状態が続きました。この強風と乾燥のため、広島県では山火事が延焼拡大しました。

「春一番」は冬の終わりと春の訪れのきざしですが、このような強い南風が吹くと、急激に気温が上がり乾燥することがあります。このような気象状態で火事が発生すると強風にあおられて燃え広がりやすくなります。空気が乾燥して、強い風の吹く日には、火の元に一層の注意が必要です。

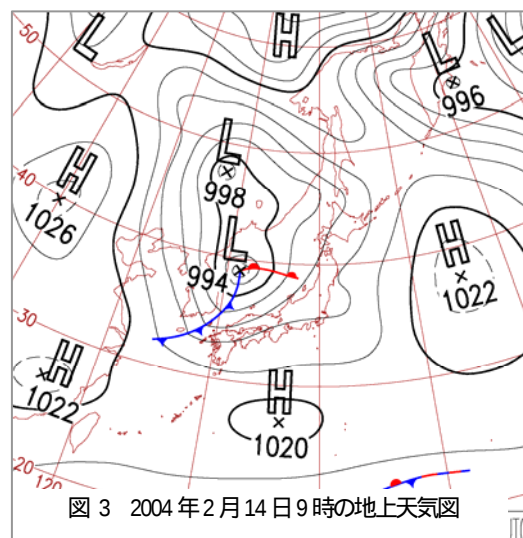


図3 2004年2月14日9時の地上天気図

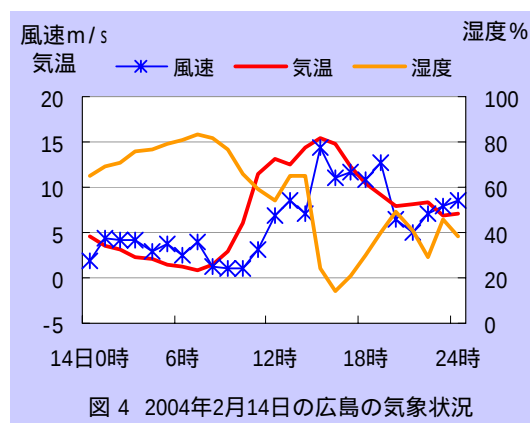


図4 2004年2月14日の広島市の気象状況